

新聞にこんな記事が掲載されていたので をご紹介します。

毎日新聞 2021.8.19 朝

〔第3種郵便物認可〕

くらしナビ

— 社会保障 —

路上生活22歳「職員の暴力」訴え



約5カ月に及ぶ路上生活を送っていた時の尾中祐樹さん
—東京都新宿区で2月7日、黒田阿紗子撮影

虐待 そのあと

— 親から離れた私の願い —



施設で受けた傷

親元で暮らせなくなった子どもを育て、自立へとつなげる児童養護施設。しかし、現実には、そこでも体や心に傷を負う子どもがいる。「施設で虐待を受けました」。尾中祐樹さん(22)が被害を公表したのは、施設を離れた約4年後。家も仕事も失い、路上生活に追い込まれた時だった。

●外部に訴えられず

現在は、尾中さんが通告した「虐待」の事実関係を、県と施設側がそれぞれ調査している段階だ。だが、確かに言えることがある。当時の施設では、子どもが理不尽だと思う職員の対応を、外部に訴える仕組みが機能していなかったということだ。

本園には鍵付きの「意見箱」があったが、誰が中を見るのか分からず機能していなかった。施設が毎年、子どもたちに行うアンケートにも「本園のことは書けなかった」。3年に1度は第三者評価が行われていたが、体罰が指摘されることもなかった。

中学生の時に一度上級生が施設を抜け出し、児童相談所に虐待を「直訴」したことがあった。だが、児相の事実確認に施設側が否定し、何も変わらなかった。

今年1月には施設側も記者会見。尾中さんが公表した一部の体罰を認めて「虐待はあった」と謝罪したが、日常的な虐待は否定した。運営法人の理事長は毎日新聞の電話取材に「弁護士や学識者による第三者委員会を作り、調査をしている」と説明したものの、結果が出るめどはたっていないという。事実関係を確認しようとする「ご勘弁願いたい」と繰り返した。

【谷本仁美、黒田阿紗子】

◆ 連載「虐待そのあと」は毎日新聞のニュースサイト「医療プレミア」で全文を読むことができます。下は26日に掲載します。

●生後すぐ乳児院に

生後間もなく乳児院に預けられた。後に実母からは「不倫でできた子」だと聞かされ

「殴る蹴るは当たり前」「職員に突き飛ばされて目の上に大きな傷を負ったが、病院でうその説明をされた」「学校に行く時間を除き、朝起きてから夜寝るまで何日も廊下に立たされ続けた」。通告後は、記者会見を開いて被害を訴えた。ここに至る長い道のりが頭の中を巡った。

小学1年の冬、荒れる様子を見かねた施設側によって、同じ運営法人のファミリーホームに移された。「これからは私をお母さんと呼びなさい」。実母より少し年上の女性職員に言われた。職員が住む一軒家に、6人の子どもの生活。同じ少人数の暮らしでも、職員が通いでケアをするグループホームは「施設」だが、そこは職員の「家庭」として扱われた。

学校ではトラブルが絶えず、「お母さん」が菓子折りを持ってあちこち謝りに行ってくれた。蹴り壊した学校の戸も一緒に修理。運動会は応援に来て「頑張ったね」とほめてくれた。

だが、ファミリーホームで問題が起こると、いつも「本園に連れて行く」と脅された。それは幹部職員による体罰を意味していた。殴られ、学校へ行く時以外は本園から出ることを許されず、長い時は3カ月も戻れなかった。だから、

自分にとってファミリーホームは独立した家庭ではなく施設の一部だった。それでも、「お母さん」は特別な存在で、信頼していた。